

草庵仏教

第142号
(発行日)
2002年4月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

檀ハラミツ行

P 「人間はどういう生活を心に
かけるべきか、それが今日では
よくわからなくなっているよう
に感じます」

D 「人としてどう生きたいか
かという生活の規範のことです
ね」

P 「ええ。そこで仏教の教えの
中に、あるべき生活規範のよう
なものがあればお聞きしたいで
すね」

D 「それについては、多くの大
乗經典に真実を求める者の行う
べき行として六ハラミツが説か
れていて、それが参考になると
おもいます。六ハラミツは人と
してのもっとも願わしい行為の
規範です。又それによって私た
ちの現実の行いはどうなってい
るのかを照らし出す鏡でもあり
ます」

P 「では六ハラミツについて教
えてください」

D 「六ハラミツのハラミツとは
到彼岸行と漢訳され、彼岸とい
うさとの境界に到る行いのこ
とです。この六ハラミツの教え
から私たちは多くのことを学ぶ
ことができます」

P 「ではその六ハラミツとは」
D 「檀ハラミツ、持戒ハラミツ、
忍辱ハラミツ、精進ハラミツ、
禪定ハラミツ、智慧ハラミツの

六つです」

P 「最初の檀ハラミツとはどう
いうものですか」

D 「檀ハラミツは布施ハラミツ
ともいわれます。それは自分の
持っているものを他に分かち与
えることです。財物でも知識で
も自分に独占しないことです」

P 「財物だけでなく自分の持つ
ている知識や技術もふくまれる
のですね」

D 「ええそうです。中でも自分
にいただいた真理を独占せず、
人に与えることが勧められてい
ます」

P 「真理とは」

D 「身近に言えば仏法です。仏
法を施すこと、いわゆる法施の
ことです。つまりいただいた仏
法を人にお伝えしたりお勧めし
たりすることです」

P 「僧侶が説法することですか」

D 「そうですが、しかしそれは
僧侶だけのことでありません。
だれでも自分に聞かせていた
だいている仏法を自分だけの真理
にしないで、他者にお勧めした
りお話しすることは檀ハラミツ
になると思います」

P 「聞法と一緒に行くこととお誘
いすることも入るのですね」

D 「ええそうです。その外、子
や孫に仏法のお話しをすること
や、仏法に関する本などをさし

あげることも入りましょう。特
に自分が生活の中でお念仏申し
ていくことは自分自身が仏との
交わりを深めていくだけでなく、
周りの人にお念仏が流れていく
大きな縁になりますから、お念
仏の実践そのものが自然に法施
になると思います」

ことは、浄土に生まれることを
本当に願って生きることに自然
になっっているのだという意味で
す」

P 「お念仏を申すことが自然に
お念仏が人に伝わっていく縁に
なるのですね」

D 「ええ、お念仏自身に自利
他といつて自分が救われ人が救
われていく徳がこもっているか
らです。お念仏の有難さを信じ
て称えるなら、なお一層のこと
です」

P 「私が人を助けようと意識し
て計らわなくても、お念仏を有
難いといたいて称えていくこ
とが、お念仏そのものにこもつ
ているお徳によって利他の行で
ある檀ハラミツをなしているこ
とになるのですね」

D 「ええそうです。聖人はそこ
を『尊号真像銘文』に

**南無阿弥陀仏をとなうるは
すなわち安楽浄土に往生せん
とおもうになるなり。また一
切衆生にこの功德をあたうる
になるとなり**

と仰せられています」

P 「南無阿弥陀仏をとなうるは
すなわち安楽浄土に往生せん
とおもうになるなり」という意味
は？」

D 「南無阿弥陀仏を称えている

P 「では、一切衆生にこの功德
をあたうるになるとなりは？」

D 「お念仏申すことは、一切の
人にお念仏の功德を与えていく
ことに自然になっっているのだと
いう意味です。それはくれぐれ
も私が偉いからそうなるのでは
なく、先ほども申しましたよう
にそのような功德がお念仏その
ものの中にこもっているからで
す」

P 「お念仏を称えていることは
そういう大事な意味が自然に具
わっているのですね」

D 「ええそうです。次に檀ハラ
ミツには財施というのがありま
す。自分の持っている財物を他
の人に、特に生活に困窮してい
る人たちに分かち与えることで
す」

P 「他の人に分かち与えず、施
与することを惜しみ、自分だけ
が豊かな生活をするのは浅ま
しいことであり恥ずべきことで
すね」

D 「人間は食欲の煩悩をもって
いますから、とかく財物をひと
りが物がにしがります。そう
でなくて困窮している人たちが
思いやっつて、そういう人のため
に融通することです」

P 「他者への思いやりからの施
しですね」

D 「そうですね、財施は慈悲の

行いですが、同時に自分自身の貪欲を離れる行でもあります」

P「今日、南北問題といわれて、物質的に豊かな一部の国がある反面、飢えている多くの人がいる貧しい国がたくさんあり、国家間における貧富の差が問題になっていきますね。財施というところからいうと、貧しい国の経済的な安定のために、豊かな国が援助することも広い意味で財施になると思いますが」

D「私もそう思います。そこで国連とかODAやNPOなどの貧しい国への経済的援助に私たちが賛意を表し、協力していくことは広い意味で財施につながっていくと思います」

P「NPOなどの福祉的奉仕的活動に寄付したり、あるいは参加することなども財施なるのですね」

D「そう思います。外に檀ハラミツとして、無畏施といわれるものがあります。畏れなき心をほどこすことです。不安をもち嘆き悲しんでいる人に、言葉や態度で安心を与える行為です。無量寿経に出てくる法蔵菩薩の行に和顔愛語というのがあります

が、あれですね」

P「和顔というのは」

D「おだやかでやさしい表情で人に接するということです。ほえみは他者へ（私はあなたをに悪い思いをもっていません）というメッセージですから、和顔によって人は安心するのです。

逆に硬く厳しい表情は人に（私はあなたを不愉快に思っている）というメッセージになりかねませんから、相手を不安にしないで済みます。もちろん和顔は無理してつくろうものではなくて、人へのやさしい心づかいからの現れであるはずですよ」

P「愛語というのは」

D「人に対して愛情のこもったやさしい言葉を語るということです」

P「現代の日本では、人から単に物をもらおうより、人からほえみかけられやさしい言葉をかけてもらいたいという、そういう無畏施というのが非常に求められていると思います」

D「以上、檀ハラミツの行為の内容を申しましたが、檀ハラミツを行うについては心のあり方が大切だといわれています」

P「檀ハラミツを行う心持ちです」

D「ええ。仏教では檀ハラミツは清浄な心で行うことが求められています」

P「清浄な心とは」

D「自分の持てるものを他に分かち与える時、（我なせり）とか（あの人にあげた）とか（これこれのものをあげた）とか、そういうこだわりやとらわれをもたないことです」

P「単に他者を援助すればよいというのではなくて、援助するにしても（私がしてあげた）というとらわれが無いことが理想

とされるのです」

D「そういうことです。これが非常に難しいのです。（私がしてあげた）という自意識は自らを高慢にし、された人を圧迫し負い目を与えかねません」

P「よく、（私はあの人困ったときに助けてあげたのに、私が困ったときには知らん顔をしてる）と腹を立てる場合がありますね」

D「そうなる援助したことが逆に、自分の腹立ちの種になりかねません」

P「（へしてあげた）というのでなく、（させていただけた）というような心で行うことなのではないか」

D「ええ、善を行おうとしても行えるためのいろんな条件がととのわなければ出来ません。善は自分の善意の計らいだけでなせるものではありません。ですから（よいご縁をいただいたおかげで人の援助もさせていただける）という謙虚でしかも見返りを一切求めないのが清浄な心だといえます。このことに関連

があります」

P「それはどんな話ですか」

D「一昔、ある寒い冬の日、橋の下でブルブル震えてうずくまっていた乞食がいた。たまたま傍を通りかかった禅僧が、その乞食を見て哀れに思い、着ていた衣を一枚脱いで投げ与えた。それを着た乞食はジロツ

と一目見ただけで、何の言葉も返ってこない。その僧、礼の一言ぐらひはあってもよさそうなのに何も無いものだから、たまりかねて「どうだ、少しは暖かくなつたかな」と声をかけた。そうしたらその乞食「着れば暖かいに決まっています。わかり切ったことをなぜ訊くか。与える身分をよるこべよ」と言い放つた。

その僧、人に物を与えてなにがしかの見返りを期待している自分の執われを羞じたという。一昔この話は見返りを待たない根性を指摘していると同時に、人を援助することが出来るのは援助出来るほどの恵まれた条件があればこそ人助けも出来るので、私の計らいだけでは出来たのではないこと、また何か出来たとしても自分の功績のように思ってはならないという話だと思えます」

P「いろいろ檀ハラミツについてお聞きしましたが、Dさんご自身の上ではどのように行っているのですか」

D「檀ハラミツは非常に尊い行為だと教えられます。そのように教えられるにつけても、とても檀ハラミツが出来ている私でないことを本当に知らされます。私はどうみても落第ですね。ただ、良き縁に恵まれるなら真似でもよいから少しなりともさせていたいただきたいと思えます」

P「ご自分は檀ハラミツは落第

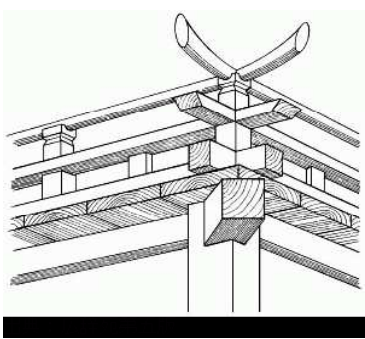
だとおっしゃるのでね。そういうご自分をどう思えますか」

D「お粗末でおはさしいと思っても、私を彼岸の浄土に生まれさせたいと、法蔵菩薩が彼岸に到る修行である檀ハラミツを、永劫かけて私たちのために勤め上げて為しとげてくださり、その功德を南無阿弥陀仏におさめて、私たちに与えてくださる。

このご恩の結晶が今の私に与えられているお念仏です。このお念仏が私を浄土へと運んでくださるので。私の浄土往生は法蔵菩薩が六ハラミツを為してたもうおかげだと、お聞かせいただいています」

P「さとりの世界に到るための六ハラミツを行えない私たちのために代わって法蔵菩薩様が仕上げ、それを私たちに与えてくださる。それによって私たちは彼岸の世界に到ることが出来るのです」

D「そのようにお聞きしています。ですから阿弥陀仏のご恩を思って、少しなりとも施しに心をかけたいと思えます」（了）



歎異鈔 第十二章 第一講

経釈をよみ学せざるともがら、往生不定のよしのこと。この条、すこぶる不足言の義といいつべし。他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏をもうさば仏になる。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。まことに、このことわりにまよえらんひとは、いかにもいかにも学問して、本願のむねをしるべきなり。経釈をよみ学すといえども、聖教の本意をこころえざる条、もつとも不便のことなり。(歎異鈔第十二章より)

(現代語訳)

教典や祖師方の書かれたものを読んだり学んだりすることのない人々は、浄土に往生できるかどうかわからないということについて。

このことは、論じるまでもない誤った考えといわなければなりません。

本願他力の真実の教えを説き明かされている聖教にはすべて、本願を信じて念仏すれば必ず仏になるということが示されています。浄土に往生するために、この他にどのような学問が必要だということでしょうか。

本当に、このことがわからないで迷っている人は、どのようにしてでも学問をして、本願のおこころを知るべきです。教典や祖師方の書かれたものを読んで学ぶにしても、その聖教の本意がわからないのでは、何とも気の毒なことです。

*

歎異鈔第十二章は、学問しなければ本当のことは分からない、したがって往生することは出来ないということに対して、まことの道はそうではないということを示すべられた章です。ここに載せた部分は第十二章の最初の部分です。

*

その当時、この部分のあとに出てきます「なにごころもなく、本願に相応して念仏するひと」に対して、「ただ単に本願の仰せを聞いて念仏しているだけでは浄土往生はおぼつかない。念仏がなぜ浄土に往生できるのかというそのわけがらをよくよく経文や祖師方の解釈を学んで理解しなくてはならない。念仏で助かる道理をわきまえてこそ、本当の念仏になるので、わけもわからずに念仏しているようでは、あなたが往生できるかどうかあやしいものである」と言い立てる人たちがいたのでしよう。

*

歎異鈔第二章では「念仏は本当に浄土に生まれる行であるか。もしそうならなぜ念仏が浄土に生まれる法であるかという、その道理をはっきりさせたい」という問いをかかえて、関東におられたお弟子たちが京都におられた聖人のもとをお訪ねになったと思われまします。そういう問いに対して聖人は「念仏は本当に浄土に生れる因なのか、逆に地獄に墮ちる行なのか、まったく私の知るところではありません」とはっきりと仰せになりました。

こうした関東のお弟子の質問の背景には、「経釈を学んで、念仏が浄土往生の道であるという理由をよく心得なくては浄土の往生はおぼつかない」という異義を

称える人たちがいて、そういう人たちに

惑わされて疑問が湧いてきたのでありましよう。それで関東から聖人の処にまで足を運んで「本当にお念仏で往生できるのでしようか。なぜお念仏で浄土に生まれることができるのかその道理を聞かせてください」と念仏で助かるわけを尋ねられたのではないのでしょうか。それに対して聖人は「念仏が浄土に生まれる種かどうか、私は全く知らない。ただよき人法然聖人から、(我が名を称えよ、かならず助ける)という弥陀の本願の思し召しを聞かせていただいて、有難さのあまりただ仰せのままを信じて念仏申しているほかにはありません」とお答えになりました。

それによつて聖人は、関東のお弟子たちが念仏の知解を求め、知的に了解することによつて自身の念仏往生を確かめようとする計らいを根底から払われたのではないのでしょうか。

我が身が助かる一段においては、本願を信じ念仏申すばかり、その他に何も要がないのです。学問も知解も要はありません。

本願をただ信じ、ただ称える、その他にさしはさむべき何もありません。(助けらるで、念仏申せ)という本願の仰せに信順し、仰せのままに念仏している。そのままが本願力におまかせしていることになつていのです。

ところが(それは盲信というもの、本願念仏で救われる道理をよく了解しなければならぬ)と念仏の知解を要求する、いわば学問沙汰を求めてくるなら、それは間違いであると唯円房はここでいわれるのでありましよう。

もし学問が浄土往生に必要ななら愚かな

ものは救いから除かれます。『教行証文類』には慈愍和尚の『般舟三昧経』の釈文を引用して、弥陀の本願は「貧窮とまさに富貴とを簡はず。下智と高才とを簡はず。多聞と淨戒を持てるとを簡はず。破戒と罪根深きを簡はず」(貧しいものと富めるものをわけへだてることなく、博学多聞のものも清らかな戒律を持つものもわけへだてることなく、戒律を破つたものも罪深いものもわけへだてることなく)

*

我が身の助かる道は一文不知の尼入道と同じく愚かな者として、ただ単純に「本願を信じ念仏申す」ばかりですが、もし学問をするのであれば、本願の正しいむね(思し召し)をよくよく理解するために学問をしないといわれます。

それは学問を否定されるのではなくて、万人を平等にさわりなく救いたもう弥陀の本願の広大深甚の思し召しを知るために、あるいは救われた上から、本願救済の道理を深く尋ねるため、どれほど学問してもいいし、それは教化のために大いに役に立ちましよう。ただし、学問は人間が救われるための条件では毛頭ないのです。

それなのに、浄土往生のためには学問が必要であるという学者ぶつた人たちは、たとえ浄土の教えを学ぶにしても、浄土のお聖教の本意が理解できていないので、気の毒なことであると、ここでいわれるのです。

信仰夜話

『松並松五郎念仏語録より』

○老人曰く「私は今度の一大事の後生は間違いない、お浄土まいりは」と。

それは、貴方が思うのなら何にもならぬ。阿弥陀様が「この南無阿弥陀仏であなただの往生は間違いない」と信じとおられる。その影があなたの心にとどいて念仏となる。

「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり」と。 南無阿弥陀仏

*

「浄土に生まれることは間違いないと私は思っています」というその思いはいかほどしっかりと書いていても、それは凡夫の思いである。そんな思いはあぶないもので、「往生はきつと間違いない」と思いを固めているのが信心ではない。自分の方にしっかりとした固い信心をつかむのではない。私の思いはいつまでたつてもしっかりとしないし、堅固にもならない。私の思いはふらふらであり、動きどろろである。

私の心はしっかりと書いていようが、いまいが、私の心や思いに全く用事はない。ただ仏の誓いを仰ぐのみ、見るのみ、聞くのみである。仏はどう仰せられるかを聞くのである。いつ聞いても「この南無阿弥陀仏で汝の往生は間違いない」であり、私の往生を信じ切った私の南無阿弥陀仏になって出てくださる。「若くは不生者不取正

覺」と、仏の堅固な信じ心すなわち（汝を助けるにまちがいない）と信じきつておられる、それを仰ぐのみ、聞くばかりである。それだけで安心。「かならず助けるに間違いない」のまことが私の上に届いてくださるのである。

「私の往生は間違いない」と思えるかどうかではない。間違いないと何時でもしっかりと思えるかどうかを調べる必要もない。しっかりと思えても思えなくても、私の思いの全ては私の往生には関係はない。私の往生は私の思いの有様によつて決まるのではなく、「往生させる」と決めてくださった仏の大悲誓願力によるのである。

「必ず助ける」という本願が私に届いているところを信心という。それゆえに「信は願より生ずれば」と仰せられるのである。和讃にあるごとく「若くは不生者のちかいゆえ、信樂まことにうる」のである。木村無相さんの歌に

「私の信心雪だるま」

おてんと様でりや すぐとける

おてんと様が「信心」

とある。「私は助けられるに間違いないと思えます」という思いが雪だるま。そんな思いは弥陀の本願の前には役に立たず、邪魔にもならぬ。確かな弥陀の本願のおてんと様を仰げば、雪だるまの信心に用はない。「きつと必ず汝を」という弥陀の本願の確かさを聞いてみるのみ。信心の中身はまるまる弥陀の本願である。

「お櫃のご飯は、だれだれ」と言う區別はない。家内中のご飯である。私の茶わんに入ったご飯は、私のご飯であ

る。私の口から現れて下されるお念仏は、私自身への名指しの呼び声であります。 南無阿弥陀仏

*

（寿命はかりなく、智慧はかりなく、慈悲はかりなく阿弥陀仏。阿弥陀仏は一切の衆生を照らしている。観経に「光明遍照十方世界」とある。阿弥陀仏の光明は十方の世界の衆生をくまなく照らしてくださっている。

その阿弥陀仏が全徳のまま、南無阿弥陀仏と私の口から現れ出てくださる。南無阿弥陀仏と称え出てくださるお念仏は、私を助ける阿弥陀仏である、私一人を助けるが為の私を助ける私の阿弥陀様である。

万人を照らす阿弥陀様はお櫃の中の御飯のようなもの、その阿弥陀様が私一人を助けて私をまるまる助けずにはおかないと、私の上に現れ、私を名指して「汝の往生は引き受けた。私がついている」と喚びかけたもう。それはちやうど、私の茶わんに盛られた御飯のようなもの。

私の茶わんの御飯は私が食べることに出来る、私目当ての私一人のための御飯である。南無阿弥陀仏と口から出てくださるお念仏の声は私を助ける私の阿弥陀様にまします。如来や仏といえは、遠く存在と聞いていたが、こんなに近くによりそいたもう仏とは知らなかった。禿頭誠師の歌に

「朝夕に 口よりいずる仏をば

知らで過ぎにし ことの悔しさ」

とあるが、ようこそ、ようこそ南無阿弥陀仏

〈住職つれづれ白話〉

(了)

鈴木宗男議員が自民党を離れた矢先に辻元清美議員の秘書給与問題が浮上し、マスコミをにぎわしている。鈴木議員も辻元議員も国会議員の中では活動家であり、利権だけを貪る悪徳政治家という感じは私にはしない。鈴木氏が北方四島問題やケニアの問題などで努力をしてきたこともウソではないだろうし、いわんや辻元氏は個人的利益の関心で行動してきた人ではないであろう。ただ、前向きな活動家であればあるほど、自分の足下を常に点検し清潔にしておかねば墓穴を掘ることになる。蓮如上人は「行くさきむかいはかりみて、足もとをみねば、踏みかぶるべきなり。人の上ばかりにて、わがみのうえのことをたしなまずは、一大事たるべき」と仰せられている。積極的に外に開わり、しかるべき時には他を批判すること、自分の足下を厳しく反省し点検することとは平行すべきものである。ただなかなか両立しがたいのも現実である。辻元氏も鈴木氏を「うそつき」と批判した後で、初めての記者会見で虚偽声明をしたことは、聞いている側にしては落胆せざるを得ない。あの時に「秘書給与をごまかしていました」と素直に懺悔することは何故出来なかったのか。これは辻元氏だけのことではない。私の日常でも「素直に自らの非を認めてあやまる」ことは容易にできない。それほど己を肯定したい自我の煩惱が非常に強いのが私たちの現実なのであろうか。

*花粉の季節で目がかゆい毎日であったが三月下旬になってやっとおさまってきた。今年の花粉症は軽度ですみ楽であった。

*三月十七日。Mさんの納骨で宝塚市にある曹洞宗寺院の境内にある霊園に行く。霊園事務所の事務員さんの話では、今度の大地震で本堂が倒壊し、本堂再建するにも檀家さんが二十軒弱しかなくて資金の目途が立たず、境内地の半分を霊園化して販売し、それを本堂再建の資金にするとのことであった。